特261
227

菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其八）

始

特261
227

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其八）

昭和十三年四月一日
本館

碧巖錄提講

第十六則　鏡清啐啄機

啐啄につき、香嚴禪師の投機底を一寸語つて見ませう。九峰禪師の詩に

「放下身心如弊箒、拈來瓦礫是黃金、驀然一下打得著、大地山河一法沈、」

是は香嚴禪師が擊竹の聲で大悟なされた當體を吟じた詩であります。香嚴禪師は潙山禪師の處で純一に修行なされた、されど却々悟れない。潙山を泣いて去り、慧忠國師の遺跡を弔

うて、茲に暫時錫を止む。詩の起句にあるが如く身心を放下して此事三昧、弊箒のそれの如し。第二句は、身心を大道の爲に捧げて更に愛著せざる、それは、吾大燈國師が五條橋下で乞食となり修行なされた、それに彷彿たり。「憂きことのなほも此身につもれかし、すてし心のまことをや見ん。」香嚴禪師、毎日々々草苅や掃除をして居られました。或時、箒の先で瓦礫を竹藪へ拂ひ落しました。その瓦礫が竹に打當つて、ガラリと聲がした。茲に於て香嚴大悟、故に瓦礫是黄金。第三句は瓦礫が竹に打當つた形容、――――驀然一下打得著。――第四句、其驀然一下の處でガラリと云ふ聲に和し身心放下、山河大地盡乾坤も同時に沈む。そこに香嚴禪師の父母未生以前の面目が踊り出た。――――諸君も鏡清禪師の啐啄を參考にして自己の面目を突出なされ。

◎垂示

垂示云、道無横徑、立者孤危、法非見聞、言思迥絶、若能透過荆棘林、解開佛祖縛、得箇穩密田地、諸天捧花無路、外道潛窺無門、終日行而未嘗行、終日說而未嘗說、便可以自由自在、展啐啄之機、用殺活之劍、直饒恁麼、更須知有建化門中、一手擡一手搦、猶較些子、若是本分事上、且得沒交渉、作麼生是本分事、試擧看。』

垂示に云く、道に横徑無し、立つ者は孤危。法は見聞に非ず、言思、迥絶す。若し、能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得れば、諸天、花を捧ぐるに路無く、外道、潜かに窺ふに門無けん。終日、行じて未だ嘗て行ぜず、終日、説いて未だ嘗て説かず、便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、殺活の劍を用ふべし。直饒、恁麽なるも、更に須く建化門中、一手は擡げ、一手は搦へて、猶些子に較ること有るを知るべし。若し、是れ本分事上ならば、且く得たり、沒交渉。作麽生か是れ本分の事。試みに擧す看よ。』

垂示の字句につき一應説明して置きます。(極めて簡單。)「道」佛祖の大道、――自然の眞理、天然の公則、而して人々具足、箇々圓成、それであります。「無横徑」萬里一條鐵、――古今二路なし達者共に往く。孔子は曰く、吾道一以て之を貫く、前聖も後聖も其揆一なり、千古不變、萬古不易。――「立者」世尊は三十歳にして成道、孔子も三十歳にして立。立つとは其道に安心立命することなり。精神上見識の確立したる時を立つと云ふ。――井ザリの腰の立つたのと同一視する勿れ。お互は此の道に確立が出來ましたか。人として此の道に確立せざれ

ば、蓋し人間の幽靈、お化けである。――百鬼夜行、――百鬼晝行、――何れを見ても幽靈、特に現代は極めて幽靈が多い。――「孤危」危險と云ふ意味ではありません。依草附木の精靈でなく獨立獨行、それを孤危と云ふ。壁立萬仞の意。見よ宇宙は元より宇宙間にある物、一として獨立獨行せざるものなし。靈長の人間、何が故に獨り獨立獨行せざるや。自己返照すべし。「法」有形無形、一切の事物を包含する總名、道と共通に古來今使用して居ります。法に二法なし、道に二途なし。――法は正法、道は正道、道は實體に重みを置き、法は活動に重みを置く。要するに法も道も心外にあるなし。法の源は心なり、道の根は心なり。一心、法となり道となる。――「迥絶」極めて遠いこと、遼遠と云ふ意なり。白雲萬里。――信心銘には言語道斷とあります。筆舌の及ばざる處、隨つて思慮も至らざる處。――何物が眞に迥絶、――各自固有の心性是なり、迷ふが故に。「荆棘林」世間門で云へば、有形にして相對的、出世間門で云へば、無形にして絶對的、何れも肉體を苦しめ精神を惱ます。其の苦しむる其の惱ましる處から形容して荆棘林、猿取りいばらと云うたものであります。されど煩惱即菩提、生死即涅槃と云ふ大乘門からは、荆棘林を轉じて栴檀林となすことが出來ます。更に進んで栴檀林も透過する

必用がある。――「佛祖縛」五千四十餘卷の經文も、一千七百則の公案も、敢て正眼に觀見し來らずとも、病者には藥であるが無病の人には寧ろ毒である。それと同樣、迷者その人には或は解脫の法門となるかも知れぬが、悟者その人には寧ろ自由を束縛する金鎖玉繩である。呼んで是を佛祖縛と云ふ。一名自繩自縛、――又は無繩自縛とも云ふ。「穩密田地」穩密とは讀んで字の如く神秘的、――田地とは境界、――連續して云へば、大悟徹底の境界、大安心の田地、所謂、了事納僧消一箇、長連床上展足眠、』それであります。諸天捧花云々は都合上、後刻申し上げます。――「啐啄之機」啐は、卵内の胚子

が十分に發育し、もはや一箇の雛となつて外界に出てもよいとき、其の雛が卵の内部から嘴を以て殼をたゝき破ることを意味する、それが啐。』――啄は、内部の活動を直覺的に知つて、丁度よい時に、牝の親鷄が自分の嘴で卵をつゝき破ることを意味する、それが啄。――親鷄と卵内の子鷄と、同時同刻、期せずして親子投合した處を啐啄之機と云ふ。敢て禪學者と禪の師家とに限らぬ。――されど今は專ら禪學者と禪の師家とに托して云へば、參禪者の大悟の境に方に到達せんとする精神上の準備が充分出來た時を見計らつて、師家たる人がその期を失はず開悟の手引をなす、それを表示して啐啄と云ふ。――故

に啐啄一句の字眼は機の一字であります。機を得るときは萬事成功、――――機を失するときは一切不成功。――――「建化門中」是は第一義門でなく、第二義門、建化門とは略語、具さに云へば建立化他門と云ふべきである。意味は一切衆生を教化する場合と云ふこと。是も佛教に限りません、何れの方面にも恁麽の場合はあります。坐石雲生衲、添泉月入瓶、』――――月到中秋滿、風從八月涼、』――――「一手擡、一手搦」一手はもたげ、一手は、おさへ、』擡は縱、放行、――――搦は擒、把住。』――――是が爲人度生の建化門、是が下化衆生の方便、――――之是の建化門と方便の無き宗教は眞の宗教に非ず、禪も亦復然り。

――――一手擡、一手搦、如何なる場合にも放棄すべからず。――――「較此子」一手擡、一手搦、それがあつてこそ道に近い、それでこそものになる。向上に打坐するのみが道ではない、掃蕩に立脚するのみが法ではない。法の妙、道の德は、寧ろ建化門にあり、向下門にある。――――「且得、」これは唐宋時代の俗語で、「ほとんど――――に近し、」と訓ずべきだと井上君は教へました。然らば下の沒交渉と共に、「且く沒交渉たること」を得、」其の意味は、近前することは及びもない、前の垂示にあるが如く難爲湊泊、――――とりつく場所がない。――――心外に一物なし、何の湊泊なしがたきことかあらん。』

重ねて垂示を提講すること左の如し。老婆の落草談と笑ふ人は笑ふべし。度生一念、止むことを得ません。『道は即ち大道、古人曰く大道長安に透る。』――又曰く大道直きこと髮の如し。』――道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ず。』――大道には横徑なし、圓なること大虛に同じ。無缺無餘、――其の大を語れば縱に三界――其の廣を說けば横に十方、――道本と圓通、宇宙と云はず乾坤と云はず、世界中に道なき處なし。――看よ天は高く地は低く、柳は綠、花は紅、頭上脚下、見聞覺知、――悉く道の丸出し、總て道の全體。――「水鳥の往くも還るもあとたえて、されども道は忘れざりけり。」

――「梁傳ふねづみの道も道なれば、誠の道は人の行く道。」――一句定乾坤、それも道、――一劍平天下、それも道、――寰中は天子の勅、塞外は將軍の令、それも道、――主賓分兎馬、棒喝辨龍蛇、それも道、――云ひ換へれば、道の乾坤、道の宇宙、道の佛法、道の世法、道の古往今來、――道々々、道あるのみ、道、――之是の道を體得し、之是の道を悟得し、之是の道に安心安住する、其の人を立者と云ふ。立者の人に非ざれば孤危とは云へぬ。――孤危は道そのものゝ獨立にして露堂々たる形容詞。――兩頭俱截斷、一劍寄天寒、と云ふ境界を體得なされた人は、平生の動靜云爲そのまゝが

壁立萬仞、――等閑の行住坐臥そのまゝが大光明を放つ。之是を衝天の威氣ある獨立獨行の快男子、又は不羈獨立の破衲子と云ふ。――次に法とは大道の別名、水は竹邊より流れ出でて冷かに、風は花裏より過ぎ來つて香ばし、で、同じ水でも竹邊より流れ出づれば一層その冷を增し、同じ風でも花裏を過ぎ來れば更に香を添ふる。それと同一轍で、普通一般の道でも、佛祖の竹邊、佛祖の花裏を經過し來れば、邪法も正法となり、邪道も正道となります。況んや正法、正道に於てをや。――其正法、其正道は、相對智識を超越したる絕對的のもの。言語を以て顯す能はず、故に言語道斷と云ひ、――思慮を以て計る能はず、故に心行所滅と云ふ。――圜悟禪師の、法非見聞、言思迥絕、と斷言なされたは云ひ得て當れりであります。前に既に申し置きましたが又重ねて申します。荊棘林、それは文字言句、古則公案、畢竟邪魔もの、由來害物、――多くの人は佛の經文や祖師の公案に縛せられて自由を失し自在をなくして居ります。其の文字の閑葛藤、公案の粕妄想、それらの荊棘林を、手に白玉の鞭を把つて驪珠悉く擊碎するが如くに、なし得ざれば禪學者とは云へぬ。――俊鳥林に栖まず、活龍水に滯らず、と云ふが如くに解脫するに非ざれば宗師家とは云はれぬ。――諸君は荊棘林を透過しましたか、諸君は佛祖の繩

縛を脱出しましたか。――――縄縛を脱出し荊棘林を透過したその人こそ、箇の穩密の田地を得た宗師家とも了事の破凡夫とも申します。――――恁麽の人の胸中、恁麽の人の境界、恁麽の人の進退、――――局外者の忖度する處に非ず。故に諸天と雖も花を捧ぐるに路なく、外道と雖も潛かに窺ふに門なし。――――諸天花を捧ぐるに路なきが當然、外道潛かに窺ふに門なきが本當。――――諸君、知るや知らずや、向上の一路は千聖不傳、――――されど、向上の一路は千聖ひとしく行く。覺得底、大悟底の聖人は、胸襟に古鏡を懸け、懷抱に陽春を積み、明月の光の如く、其の光は以て遠望すべく以て書寫すべからず。又、深霧の朝

に似て、其の朝は以て書寫すべく以て遠望すべからず。――――如上の境界に安心立命、如上の覺知に當軒大坐、如上の樂土に自適從容しつゝある人の動作は實に無碍自在、圓轉滑脱、――――而して一々が法のまゝ、總てが道のまゝ、何事を行じても、何言を云うても、道そのものが事を行ふ、法そのものが言を云ふ。決して云ふ人の口で云ふでなく、行ずる人の身で行ずるでない。――――行じて行じた痕跡なきが故に終日行而未嘗行、――――言うて云うた消息なきが故に終日說而未嘗說。――――古德曰く、聖人は自己なし、自己なきが故に一切自己ならざるなし、と。一切自己なるが爲に、道に於ても法に於ても、啐啄の機

に臨んで無爲にして啐啄し、殺活の時に逢うて無作にして殺活する。――殺活必ず殺活に非ず當然の殺活、――啐啄必ず啐啄に非ず自然の啐啄。――至大而無外謂之大一、至小而無內謂之小一。『聖者の啐啄は、外なき啐啄なるが故に啐啄中の最上。聖者の殺活は、內なき殺活なるが故に殺活中の最尊。――活佛の如く活祖の如く最尊最上の大道、甚深微妙の大法を掌握し得ると雖も、自利、自知、自覺のみに安住して、利他、他知、他覺の念なき人は、所謂二乘聲聞、眞箇の佛敎者に非ず、眞箇の禪學者に非ず。――自利より更に利他に出で、自知より次第に他知に及び、自覺より進んで他覺に至る。(實を云へば先度他が本懷である。)之是を第二義門と云ひ、建化門と云ふ。云ひ換へれば、布敎傳道、爲人度生、――其の爲人度生、其の布敎傳道に隨處の方便、隨時の作略、隨機の處置がある。其の積極的手段を一手擡と云ひ、其の消極的方面を一手搦と云ふ。手段、方便、作略、には千差萬別ありと雖も、道、法、そのものに於ては終始一貫であります。――第二義門こそ、建化門こそ、道の本領に符合し、法の本體に妙投するのである。圜悟禪師は、猶較此子と云はるゝが、少々高賣りであります。――抑々、道の本領、法の本體は、衆生濟度が目的であり眼目である。其の主義、其の本意から云へば、出來得る限り安く賣り、――

なし得る限り卑近に、それが三世諸佛の本願にして歴代祖師の本望である。此の外に本分の事も向上の事も聲前の一句もあつたものでない。――――されど文章の起伏、話の抑揚として、言端を改め、語端を換へて、若し是れ本分の事上ならば且得没交渉、と云うたものゝ、建化門中、一手擡、一手搦の外に本分の事ありや、向上の事ありや、聲前の一句ありや。――――必ずしも、點滴も施さず壁立千仞にかまへ、棒を振ひ喝を下す、それが佛法の骨髄でもなければ禪の堂奥でもない。――――他を謗することなくんばよし、作麽生か本分の事、本則鏡清禪師の一手擡、一手搦、建化門中の大法擧揚底、第二義門中の大道提唱底、看一看せよ。

◎本則

擧、僧問鏡清、學人啐、請師啄、清云、還得活也無、僧云、若不活遭人怪笑、清云、也是草裏漢。』

讀方

擧す。僧、鏡清に問ふ、「學人啐す、請ふ師の啄を。」清云く、「還た活を得るや。」僧云く、「若し活せざれば人に怪笑せられん。」清云く、「也た是れ草裏の漢。」

一應、本則の字解を致します。「鏡清」名は道怤、雪峰義存禪師の弟子、雲門、長慶、保福、などゝ弟子兄弟、越州鏡清寺に住

居す。故に通稱を鏡清と云ふ。永嘉眞覺大師と同鄕の人、鏡清禪師は雪峰棒下で大悟して後、常に啐啄同時の機を以て學者を相手にし、且つ頻りに禪論を以て人に接しなされたと云ふ。景德傳燈錄に「岱師之高論、人莫窺其極也、」と記してあると井上君は云うて居られます。碧巖錄中、三回出席して居られます。

――「還」また、と讀むべし。そんなことをされては、と云ふ意味。そんなことをされては活きるものか、――死ぬかも知れぬ。――「也無」活きて居れるか、――死にはしないか。

――「遭人怪笑」可笑しなものと思はるゝ、けちな奴と笑はるゝ、誰が、鏡清禪師が。――「草裏漢」たはけもの、馬鹿、――充分の活動の出來ぬ奴、――お互は草裏の漢ではあるまいか。――草裏の漢となること敢て惡しからず。それそれが啐啄の機である。必ずしも啐啄は鏡清禪師の專有ではない。天下の共同、古今の通用。――

以下、本則を總括して一言申し上げます。

茲に鼻孔遼天の雲水僧あり。或日、鏡清禪師の處へ來り、(銅頭鐵額であれば賞すべきであるが、) 私は多年修行して居ります。只是が手引す。故に大悟開發の支度は十分に出來て居ります。を待つこと、丁度、殼をたゝきこはして出ようとして居る雛の樣なものであります。(果して然るや、或は、苗を助けて枯らす

者ならずや。）恐入りますが、禪師、親鷄が嘴で外部からコツンと叩いて卵中の雛鳥を出すやうに、御方便を以て此の私をして妄想卵中を跳り出る樣にして頂き度い。――――徳山禪師であるならば無論三十棒、――――臨濟禪師であるならば大喝一聲の處。鏡淸禪師は然らず、袖裡に鐵鎚を藏し、徐に口を開いて曰く、貴殿は意外に我見の强い男だ。貴殿の云ふ樣に手引をしたなら、それが爲に貴殿の生命に異狀を來さないとも限らない。（或は雛が死ぬかも知れぬ、悟りそこねるぞ。）僧、尙ほ我見の角を振り立て、生意氣にも、若し私の生命に別狀があつて死ぬやうなことがあれば、（悟りそこねれば、）それこそ禪師に啐啄の機も殺活の劍もないからだと云ふことになり、世間の笑ひ草となります。――――自己の未熟、自己の不始末、自己の不勉强を棚に上げ、責任轉換、――――自己のなすべきことを禪師に一切負はすとは、どこ迄も鐵面漢にして且つ蟲のよい問僧である。禪そのものゝ修行は人の爲に非ず、自己の爲なり。』大道そのもの、正法そのもの、自己が實際に踏むべきもの、自己が事實に行ふべきもの。然るを、若し私が悟りそこねますれば罪は私に非ずして罪は禪師にありとは、狂人も狂人、念入の狂人。――――馬鹿も馬鹿、非常の大馬鹿ものゝ云ひ草。常識を備へた人の思想でも言葉でもない。箸にも棒にもかゝらん人と云ふは蓋し之是

等の人を云ふのでありませう。

恁麽の僧に似たるお人が、年に二三十人位、衲の小庵を訪問致します。衲は是等のお人を氣の毒に思ひ、婆言に婆情を添へ手引に一層力を入れて相談を致します。致しますれば致しますほど、彼れ是れと理窟を並べ、此の則にある問僧以上に邪思想を所持して居る修行者の多いには、ほと〳〵喫驚致します。

鏡清禪師、「若不レ活遭二人怪笑一」と云ふ、それに對して曰く、也是草裏漢、此のたはけものめ、――此の大馬鹿者め。――可謂、運二閃電機一、用二霹靂手一、と。――之是を啐啄の機と云ひ、之是を殺活の劍と云ふ。――可憐、問僧、依然として殼中に

死居して卵外に活出する能はず。必ずしも昔の僧と思ふべからず。お互も或は昔の僧に、否、それより一層であるかも知れません。自己返照、自己返照。――

◎頌

古佛有二家風一、對揚遭二貶剝一、子母不二相知一、是誰同二啐啄一、
覺、猶在レ殼、重遭レ撲、天下衲僧徒名邈。』

讀方

古佛に家風有り、對揚、貶剝せらる。子母、相知らず、是れ誰か啐啄を同じうせん。啄、覺、猶殼に在り。重ねて撲たる、天下の衲僧、徒らに名邈す。』

「古佛有『家風』」古佛は讀んで字の如く古佛、――七佛等の佛陀如來共通の言葉、――今は特に鏡清禪師を古佛と尊稱したのであります。「家風」所謂、家憲、――見識、――主義、――例せば德山の棒、臨濟の喝、何れも家風、――鏡清禪師の家風は本則に露堂々、敢て茲に蛇足を加へません。「對揚」是は奉答の意、茲では問僧の鏡清禪師に、「學人啐請師啄、」と云うた言葉を指したもの。――「貶剝」おとしいる義、はぎおとす意、鏡清禪師が問僧に對して「還得活也無、」と答へられた、それ。――對揚、貶剝の一例は、釋迦如來初生の時、直に天地を指さし天上天下唯我獨尊と大獅子吼なされた、これが今日禪宗で謂ふ公案の濫觴。雲門禪師は千百年後に生れ之に對揚して曰く、釋迦如來が生れながらに其樣な云はずとも好いことを云うて人を騷がす。若し我れ其の時に居合はしたなら、一棒に打ち殺して犬に喰はせて了ふのであつた。さすれば、佛だの法だの悟りだの迷ひだのと云ふ面倒なことが無くて、天下泰平であつたことであらう、と。知るべし對揚、貶剝の一部分を。――啄、覺、――啄は外部からコツン、覺は內部からコツン、親子投合底。圓悟禪師は、「啄」此の一字、頌鏡清答『道還得活也無』「覺」是の一字、頌這僧道『若不活遭人怪笑』と云うて居らるゝ。果して然るや否やは、親しく雪竇禪師に問着

するがよい。――「重遭撲、」遭と云ふ字が前後二ケ處にあります。故に前の遭に對して重ねて遭と云うたもの、下の也是草裏の漢と云ふ句にも係る言葉である。またしても、かさねがさね、――好いことは重々でもよいが、惡いことの重々は眞平御免々々。――兎角娑婆世界の常則として、惡いことの重々が實に多い。寒毛卓立。――「名邈」唐、宋時代の俗語、品評、批判と云ふ意であると井上君は語れり。名邈は名頷のあて字であると云ひ添へてあります。』――大内士は、參禪の人たちが彼れの此れのと色々の名を附けたり頷を想像したりして眞實徹底し得ぬと云ふことである、と結んで居る。』井上君も大内士も及び衲も徒らに名邈するお仲間。――右の頌を一括して左に醉後の盃を呈します。醉倒なさらぬ樣に前以てお願ひ致します。』古人の句に、天は東南に高く、地は西北に傾く、とあります。天の家風は東南、地の家風は西北、――汝は其の羊を愛す、我は其の禮を愛す。羊を愛するは汝の家風、禮を愛するは我の家風。――面の異なるが如く心も又異なる。それと同じく家風も百人百色、千人千色、決して一樣一色ならずであります。されど、其の功をなすに至つては一なりで、大は國家の爲、小は一身の爲。――禪門の宗師家に於ても亦復然り。諸君の既に知らるゝ如く、釋迦如來の一法源より分れ分れて五

家七宗、二十四流となりぬ。隨つて家風一々異なり、「坐見成敗」あり、「再犯不許」と云ふあり、「因邪打正」あり、「知而故犯」あり、「以强欺弱」あり、「照用齊行」あり、「當軒大坐」あり、「正令當行」あり、「滿口道着」あり、「弄功成拙」あり、「見機而變」あり、如何に家風が異なり如何に主義が違ふと雖も、上求菩提、下化衆生の點に至つては、同じ溪川の水で、何れも釋迦如來より正傳相續の般若、以心傳心の慈悲、それに外ならず。本則にある鏡清禪師の如きは一方の宗師家にして、他宗師家と一種特別の爪牙を具有せらる。故に雪竇禪師、驀頭第一に、古佛有二家風一と（昔の佛のことではない、）吟出な

された。（斯く無造作に吟出して能く正鵠に的中する、それが雪竇禪師の家風である。）鏡清禪師の家風は對揚遭二貶剝一、それが家風の一端、家風の全部。――――問僧は自己の不注意に依り鏡清禪師に貶剝された。――――諸君、知るべし。問僧の學人啐すと云うたゞけ、それだけ既に眞箇の啐其のものに遠ざかつて居る。其の間隙を鏡清禪師見出して、「還得活也無、」と云はれた。それそれが眞箇の啄である。――――「子母不二相知一、是誰同二啐啄一」と啐啄の樣子を吟じられたは流石に雪竇禪師、祖師門下、屋裡の人である。元來、牝鷄と雛との啐啄は、自然の妙機、天然の神術。――――牝鷄が、雛の啐するを知つて啄するに非ず、

雛が牝鷄の啄するを知つて啐するに非ず。啐と啄とは畢竟期せずして相投合する、妙々、妙と云ふの外なし。母も知らず子も知らず、知らず〳〵で機々相融合、之是を眞箇の啐啄同時と云ふ。――――師が弟子に悟らせることも出來ねば、弟子が師に悟らして貰ふことも出來ぬ。只互に自己の本分を天然自然のまゝに實行するより仕方はない。――――大道は自悟すべきもの、正法は自得すべきもの。然るに問僧、「若不活遭人怪笑」と云うて居る樣では、自分は惠能大師を氣取り、米は充分に搗けて居ります、只篩にかけてありません、と云はん計りに高慢の鼻をうごめかすとは、見下げはてたる愚僧である。人の怪笑に遭ふとは何ごとぞ。――――由來啐啄の當體は、大道そのまゝ、正法そのまゝ。故に思慮分別、言語動作を以て窺圖すべきものに非ず。――――莊子の徐無鬼の篇にある話に、郢の國の人が鼻端へ白土を僅か蠅の翼ほどに塗つて、匠石と云ふ名工をして之を斲らしめた。匠石は委細承知と大斤を風の起るが如く揮つて堅即ち白土を斲つたが、少しも鼻端を傷つけなかつた。又郢人も直立したまゝ容色を失はず平然として居たと云ふ。恁麼の有樣を啐啄に比すれば敢て比せられぬこともありません。併し似て非なるものである。然るを多くの人の中には、莊子の徐無鬼篇にある話を例に引いて、禪の師弟間、悟道の得失を彼れ是れと

云ふ人がありますが、思はざるの甚だしきものである。――
恁麽の造作に渉る、それが不自然の啄、――それが不天然の覺、――猶在殼、――依然として殼の中に居る。世の中には、此の問僧より一層も二層も拙劣でありながら如何にも大悟したつもり、よし多少悟處があつたにしても電光石火的の刹那悟り、云はゞ夢に夢見た樣な幻影極まる悟りを、釋迦以上、達磨以上に大徹底したつもりで大切にして居る人がある。可謂、依然として迷殼の中に死在するもの、と。――鏡淸禪師、家風を擧揚して曰く、「也是草裏漢、」と。棒でなく喝でなく僅々五字を以て、三十棒以上、百喝以上の痛味を感ぜしめた。――是を雪竇禪師吟じて曰く、「重遭撲、」と。雪竇禪師も鏡淸禪師の家風に和して自家の一曲を奏せられた。――可憐のことは、天下の禪學修行者、鏡淸禪師の心底を知らずして、所謂、腰だめ、目分量、それで大道の中心、正法の妙處を體得しようと思惟するは、衆盲象を撫すに非ざれば三人龜を證して鼈となすの類。――雪竇禪師の、天下の衲僧徒らに名邈す、と云はれしは實に禪學修行者の五臟六腑を射透したる名言であります。――飯田師は正法眼藏の或處を一讀して曰く、「當時行はれつゝある宗敎は悉く地獄に行く仕度をして居る者のみである。恐れても恐るべきに非ずや、」と。――昔のことは、ともあれ、かくもあれ、

現今は一層恐れても恐るべき宗教のみである。(宗教そのものは眞正、是を使用する人が。) 禪は一口に生死得脫、三界出離、と云ふ。眞箇の佛教、(宗教、) 眞箇の禪學は、生死得脫の教にして三界出離の法である。故に生死得脫、三界出離、それが自由にならなければ、眞箇の佛教を手に入れたでもなければ、眞箇の禪が我がものになつたでもない。——且く出離、得脫の要を說かば、生は生に任せて生、而して生不生、死は死に任せて死、而して死不死。——生にも自己なく、死にも自己なし。生死の惡むべきなく、涅槃の樂しむべきなし。玆に至れば、緣に應じて無碍、——時に隨つて自在、東家に馬となり西家に驢となる。——特に注意すべき一事がある。經に「諸佛出世、衆生を

して生死を出で涅槃に入らしむるために非ず。但生死涅槃の見を度せんがためのみ。」と。心讀すべき金言であります。其の生死涅槃の見を度すとは抑々如何。曰く、他なし、「風吹柳絮毛毬走、雨打梨花蛺蝶飛、」——柳絮と共に走れ、——梨花と俱に飛ぶべし。——天下の衲僧徒らに名邈することを休めよ。勞して功なし、騷いでも無駄。——萬言萬當不如一默、百戰百勝不如一忍』——咄、曇華徒らに名邈する勿れ。默忍々々。——附錄として生死得脫、三界出離なされた近代の一佳話を挿畫に致します。曹洞宗の原坦山禪師は、明治佛教界の傑物

の中でも特に異彩を放つて居られた。或時、これも傑僧として名の高い久我環溪と一緒に行脚に出た際、水は淺いが橋のない小川に出會ひました。仕方がないから、二人は、裾を捲つて渡る仕度をして居ると、一人の婦人がこの小川にさしかゝり、矢張り橋がないのでひどく困つて居る樣子を見て、坦山、「ヨシ、衲が渡してやらう。」と件の美人をしつかと抱いて、向ふの岸へ渡してやりました。その夜、環溪が鹿爪らしい顔をして、「人の難儀を救ふのはよいとしても、苟も沙門の身として、女人を抱くとは以ての外の事ではないか。」――と極めつけまするとと、坦山禪師、恐縮すると思ひの外、けげんな顔をして、

「イヤハヤ、貴僧は今まであの美人を抱いて御座つたか。衲はあの時に放して仕舞つたのに。――」と云はれたので、環溪の方が却つて恥入つた、と云ふことである。禪學者は是非坦山禪師をお手本にせよ、と云ふのではない。坦山禪師の、處々眞、處々眞で、生死三界に轉廻されざる其の脫俗底を參考の資に供したまでゞあります。(支那にも是に似たる例があります。何れが前、何れが後なるかは知る人ぞ知る。)また或處で各宗有志の懇親會があつた。坦山禪師と共に明治佛敎界の四傑の中に算へられて居る雲照律師も出席してをらるゝ。愈々酒杯の交換と云ふことになると、坦山禪師は大杯を持つてヅカ〳〵と雲照律師

の前に行き、一盞献じませう、と云つてつき出しました。處が雲照律師は飽くまで戒律を楯にとつて、酒杯を手にするも汚らはしいと云つて、どうしても受けようとしない。すると坦山禪師呵々大笑して、何ぢや、酒が飲めぬやうでは人ではないわい、――と云つたので、雲照律師は顔色を變へて怒り、何ッ、――拙僧を人でないとは何事ぢや、亂暴をいふにも程がある、さ、その譯聞かう、と詰めよつた。が、坦山禪師はケロリとして、「確かに人ではない、佛樣ぢや。」と答へたので、流石の雲照律師も怒ることが出來なかつた。――多少の追加はあるにしても全然無根の話ではあるまい。是も、坦山禪師の高風を渴仰して酒を呑みなさい、と云ふ譯では無論ない。呑んでも差閊へはないが強いてお勸めはしない。要は坦山禪師の如き瀟洒たる境界、――自己を忘れて物を逐はざる處をお手本にし、自己本具の眞面目を殼外に突出することに全力を揮ひ、迷うて他の啄を請ふことに念頭を誓つて動かすこと勿れ。――

（以上昭和十二年三月十三日講演）

第十七則　香林坐久成勞

四明の古帆禪師、達磨大師を吟じて曰く、

至今聲價重叢林、　莫道神洲無賞音、
自是鳳凰台上客、　眼高看不到黃金、

本則の香林禪師の如きは蓋し達磨大師の再來か。心地を開明し、本分に安住し、緣に對せずして而して能く照し、眼雲外に明かに、『思量せずして而して能く通ず。宗、默說に朗かなり。』畢竟何を以て驗となす。曰く、坐久成勞。——

◎垂示

垂示云、斬釘截鐵、始可爲本分宗師、避箭隈刀、焉能爲通方作者、針箭不入處則且置、白浪滔天時如何、試擧看、』

讀方

垂示に云く、釘を斬り鐵を截ち、始めて本分の宗師と爲る可し。箭を避け刀を隈れて、焉ぞ能く通方の作者と爲らん。針劄不入の處は則ち且く置く。白浪滔天の時如何。試みに擧す看よ。』

例に依り垂示の字句につき一應唇皮を弄します。

「本分宗師」本分を全うする師家を本分の宗師と云ふ。俗に本物のお知識と云ふ。それは、奪命の神符、法窟の爪牙を具

足なされた人であれば、老少、智愚を論ぜず、一様に本分の宗師家であります。如何にして奪命の神符、法窟の爪牙が我が手に入るか。道元禪師示して曰く、「佛道を習ふと云ふは自己を習ふなり。自己を習ふと云ふは自己を忘るゝなり。」とある。故に自己を習うて自己を忘るゝが第一の要件。――石頭大師曰く、「聖人に己なし、己ならざるなし。」實に然り、眞實我を忘るゝ時大我を得ることが出來る。ソクラテースは「汝自身を知れ。」と云うて居る。――本分宗師の例は澤山ある。澤山ある其の中で、是れはと思ふ一例を左に擧揚しませう。

玄則と云ふ人が法眼禪師の會下にありて監院の役をして居

られた。或日法眼禪師、玄則に向つて、「お前は私の處へ來て何年になるか。」と問うた。澤山をる小僧共のことならいざ知らず、只一人しかない監院の役を務めて居る其の人が何年居るか位のことを知らぬことはありますまい。是は禪師知りつゝトボケて問うたのである。玄則は「左樣、此の處に來てから最早三年も經ちます。」と答へました。すると法眼禪師、「さうか、三年も居つたら何故に佛法を問はぬ。」玄則云く、「自分は曾て青峰の處で大安樂のところを得ましたから別に問ふことはいりません。」と。法眼曰く、「汝は如何なる言語に依りて得入せしや。」玄則云く、「某甲曾て青峰に問ふ、如何なるか是れ學人の自

己、と。青峰曰く、丙丁童子來求火、と。」法眼云く、「好き言葉である。」と。法眼は青峰の知音であるから賛賞しました。されど玄則の未だ會せざることを知り、法眼重ねて曰く、「只恐らくは汝が會せざらんことを。」時に玄則、心底を吐いて曰く、「丙丁は火に屬す、火を以て更に火を求む。自己を以て自己を求むるに似たりであります。」と。法眼曰く、「果然、誠に知りぬ汝會せざりしことを。佛法若し如是ならば今日まで傳ふるなし。」と、頂門上に鐵鎚を下されました。玄則大いに憤怒、拂袂して去る。中路に至り思惟すらく、「法眼禪師は苟も天下有名の大善知識、又五百人の大導師なり。我が非を諫む、定めて長處のあるなら

ん。」と。再び禪師の會下に歸り、懺悔禮謝し改めて問ふ、「如何なるか是れ學人の自己。」法眼禪師曰く、「丙丁童子來求火。」曾て青峰が玄則に答へられたと同じ。然る處、玄則は、法眼禪師の此の答へにて、所謂、斬釘截鐵、支末無明は無論のこと根本無明まで、斬一切斬されて大悟徹底致しました。』――此の外、大梅が馬祖禪師に向つて、「如何なるか是れ佛。」と問ふ。馬祖禪師、「即心即佛。」と答ふ。大梅言下に於て根本無明を切斷した。

――青峰禪師と云ひ法眼禪師と云ひ、馬祖大師と云ひ、何れも奪命の神符、法窟の爪牙を具有なされてござる本分の宗師であります。次に「避箭隈刀、」敵の箭を避けたり、相手の刀を畏

るゝ樣では勇猛の士とは云へぬ。――――卑怯千萬の腰拔けである。かゝる人は拔群の大功を奏することは出來ぬ。爆彈三勇士の如きを見よ。避箭隈刀たる人に非ず。國家の爲、忠孝の爲、一身を奉仕したるが故に、期せずして大功を獲得したのである。』禪は元より然り。熱喝熱棒、雨點に似て雷奔の如くそゝぎ來りとゞろき來ると雖も、敢て恐れざるのみならず、轉た進み愈〻向うて虎穴に入るべし。蒼龍の窟に下るべし。然らざれば虎兒は得られず、寶珠は手に入らぬ。獻身的々々々。――――眞箇獻身的でなければ禪そのものゝ妙味は口に入りませぬ。禪そのものゝ妙境は我がものになりません。――――「通方作者」是は四方八方に通達したる作家と云ふ程のこと。前の本分宗師は金看板を掛けた通方の作家、玆の通方の作者は金看板を掛けざる本分の宗師家と見るべし。――――昔のことは敢て問はず、現今、金看板を掛けると掛けざるとを論ぜず一律一體に、本分の宗師家もなければ通方の作者もありません。云はゞ禪界、いづこも同じ秋の夕ぐれ。――――達磨大師は再來せず臨濟禪師も出現せず、故に誰でもよい、達磨大師となり臨濟禪師となり、己墜の眞風を挽回すべし。衲は期待す、雲門臨濟百花の春を。――――「針劄不入處」針のさきもさしこむことの出來ぬ極めて間隙のない場處。例せば言語道斷の處、心行所滅の場、――――

比するに物なし、喩ふるに類なし。――強いて云へば絶對、――格外、――方外、――可謂、描不成、畫不就、――それそれそれ。――「則且置、」前を受けて、その樣な深密の場合は別として。云ひ換へれば、それはそれでそのまゝにして。――莫強舉、と云ふ意味。――「白浪滔天時」滔天とは大洪水が漲溢して天にまでひろがることである、と井上君は註して居らるゝ。――茲では大議論、――大評議、――活商量、――互に口角泡を飛ばして論難攻擊、――それを形容した支那人一流の筆法でありますす。又は百萬の軍勢が火蓋を切つて堂々攻めよせ來る場合と見るも敢て妨げなし。――

以上を總括して曰はん。苟も法幢を建て宗旨を立して御座る宗師家であるならば、迷に執し、悟に着し、今時に傾き、那邊に倒れ、繩なきに繩に縛せられ、釘なきに釘に打ちつけられ、自分と自分で不自由に困難して居る亡者に對し、金剛王寶劍を以て、電光影裡斬春風と云ふ活手腕を以て、總ての邪魔物を徹底的に切斷して亡者をして大安心、大安樂を得せしむる、之是を本分の宗師家と云ふ。恁麽の大宗師家になるには、尋常一樣の修行では到底及びもなきこと。諸君、御承知の如く、戰場に於て敵から飛んで來る砲丸を畏れたり、敵の揮り來る刀劍を避けたりする樣では、決して一番の先陣や無類の戰功は奏せら

れぬ。それとおなじく、禪の法戰場中も亦復然りである。試みに見られよ、古聖賢の衆人に拔んじ人天の信仰を受けつゝある其の所以は、何れも〳〵十年二十年、如何なる言語でも如何なる筆頭でも寫し出すことの出來ぬ大なる艱難辛苦を十二分に體驗したる其の賜である。――云ひ換へれば、辛苦艱難の多きほど其の人の道力も德光も廣くして且つ大になるのであります。古人の句に、「不入驚人浪、難得稱意魚」とある。――聞く、「艱難は汝を玉にす。」と。又聞く、「一生艱難の何物たるを解せざるものは、人生の滋味の大半を喫せざるものなり。彼等はこれが爲に人生の最奥に潛みたる眞光を發揮するの機會に接せざるなり。」と。又聞く、「鋼鐵の硬きは、これを鍛へたるにあり。精金の美なるは、これを分析したればなり。唯だ鑛山より採拾したる鑛石の儘にては、以て鋼鐵たる可からず、以て精金たる可からず。人も亦此の如し。」と。――刻苦光明必盛大。――古往今來、一人として辛苦せず艱難せずして通方の作者となりし例ありや。洋東洋西、一人として勤勉せず努力せずして超凡越格の人となりし證ありや。蓋しあることなし。――お互と云うては甚だ失敬。失敬は失敬として、お互が通方の作者とならず又本分の宗師家となり得ざるは、無論艱難辛苦が不足して居るからであります。』――六十の手習とか八十の學

問とか云ふが、只今からでも、なすは、なさぬにましであります。――共に俱に進んで艱難を愛し、喜んで辛苦を求めませう。――果して然らば完全なる通方の作者にならずとも、無缺なる本分の宗師家にならずとも、それに近い、それに類した、そのものになれば、人様を濟度せずとも、人様に濟度さるゝ様なことはありません。――人を救ふ能はざれば寧ろ人に迷惑をかけざる迄になりおくべきであります。然るに昨今は、人様に大なる迷惑をかけるお人が多いとのことであります。――「針劄不入處則且置、」佛祖も見る能はず、魔外も窺ふ能はず、――離婁と雖も、師曠と雖も、聞くに由なく、見るに分なし。――千聖の路頭も、群魔の境界も、無論通ぜず、無論及ばず。――茲を、達磨少室に居らず六祖曹溪に住せず、と云ふ。――茲を、蒼頡も向背を知らず鐘繇も端倪を辨じ難し、と云ふ。――然る所以の者は畢竟如何なる故ぞ。諸君あてゝ見たまへ。――拈華の曉、迦葉を稱し、傳衣の夜、盧能と喚ぶ。――知る能はず、見る能はず、聞く能はず。――教ふることも、示すことも、與ふることも出來ぬ。――只自知するのみ、自悟するのみ、自證するのみ。――「只見溪回路轉、不知身在桃源」――恁麼は恁麼として置くより如何ともなす能はず。停止せよ〳〵。開眼說夢』――されど、砒礪も能く人を活かし、甘

露も亦人を殺す。時と場合に依り、口談ぜんと欲して辭喪く心緣ぜんと欲して慮亡ずる端的底に向つて、白浪滔天の勢を以て議論し來り問難し出る者あらば、禪は默によろしくして語るによろしからず、と沈默しては居られぬ、――無言誠に功あり、と空うそぶいても居られぬ。――此時、此場合、玲瓏たる機智を用ふべし、花藻たる文章も用ふべし。其の玲瓏たる機智、其の花藻たる文章は、香林禪師の斬釘截鐵、深く注意をして冷暖自知せらるべし。――

◎本則

擧、僧問『香林、如何是祖師西來意、林云、坐久成勞』

讀方

擧す。僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」林云く、「坐久成勞。」

「香林」是は澄遠禪師のこと、益州の青城香林寺に住せらるる故に通稱、香林と云ふ。雲門文偃禪師の弟子、雲門禪師に隨侍すること十八年、通常の人では十八年の隨侍どころか、一二年も滿足に隨侍は出來ぬ。此の一事にても香林禪師の護法愛宗、其の心願の大にして且つ高きことが窺はれます。八十歳で示寂。示寂のときに言はれた語に、「我四十年方に打成一片。」と。此の打成一片が何事にも大切なことであります。お互は常に打成一

片でありますか。親は親で打成一片、子は子で打成一片、師は師で打成一片、弟子は弟子で打成一片、――其の他、人々すること、なすことに於て總てが打成一片であれば何より結構。若し打成一片でなかつたならば打成一片になりなさい。――強ひて打成一片にならねばならぬ。禪は打成一片を以て終始一貫して居ります。――「祖師」祖師と云へば、弘法大師も祖師、日蓮上人も祖師、遊行上人も祖師、されど茲で祖師と云ふのは達磨大師のことであります。達磨大師は釋迦如來より二十八代、支那では初祖又は鼻祖とも云ふ。（人の面を模するに第一に鼻より始む。）支那禪宗の最初なるが故に。』更に妄想を云へば、大師は弘法に專有され、上人は日蓮に取られ、猫は藝妓に奪はれ、木の芽は山椒にしてやられ、――只祖師と云へば、何人も達磨大師なりと直覺す。嗚呼大德なるかな達磨大師。

――「西來意」佛教が支那に來たことを佛教東漸と云ひ、達磨大師が支那に來たことを祖師西來と云ふ。意とは無論其の意味のこと。――此の西來意の問答は、「類集」には百三十も出て居ります。禪學者に取つては極めて大切なること。――達磨大師が印度から支那に渡來なされた、其の心底、其の目的、其の思想は、決して達磨大師以外の人には、針劄不入の處で探竿は出來ぬ。――その出來ぬ處を探竿せんと禪に心を傾ける

人は爭うて問ひ、競うて尋ぬ。――如何に尋ねても如何に問うても、眞箇祖師西來意の端的は明かになるものに非ず。又明かに答へらるゝものに非ず。問ふ人も答ふる人も、云はゞ兩箇の泥牛、戰つて海に入る。――多口の阿師、觜を下し難し。されど知る人ぞ知る。』――試みに西來意の一端を示さん。錯つて定盤の星を認むる勿れ。見よ達磨西來以前、山は高く、柳は綠、夏は暑く、晝は明か。――達磨西來以後、川は低く、花は紅、冬は寒く、夜は暗し。――達磨西來以前以後、何等の相違かある。――相違のない、そこが眞箇西來意である。――「坐久成勞」此の坐久成勞、昔も今も又後の世も

同じこと。――香林禪師は白浪滔天の勢を以て堂々議論の鋒を揮り向け來つた。それに對して坐久成勞と應答された。其の巧手、還つて火裏の蓮に同じであります。諸君、面前に若し祖師西來意は如何にと問ふ人あらば、何とお答へになります。――衲は知らぬ、――存ぜぬ、と云ひます。香林禪師の坐久成勞と是れ同か是れ別か、――明眼衲僧會不得。――以上を一括して重ねて申し上げます。本分から云へば、火は日を待たずして熱し、風は月を待たずして涼し。祖師西來意を問ふ、その人自身それは何である、此の外に祖師西來意ありや、決してあることなし。――或日、一人の僧が香林禪師に、

如何なるか是れ祖師西來意、と云ふ一問を發しました。(當時の流行、一般的に師家に對して問ふ文句である。)其の意は、達磨大師が印度からわざ〳〵支那までやつて來て、武帝と僅かに一問一答したゞけで、說敎らしい說敎もせず、是れと云ふ奇術も顯はさず、一體あの人は、なにしに支那に來たのであります か。まさか印度を食詰めて支那へ口すぎに來たのではありますまい。何れ仔細がなければならぬ。其の仔細、其理由がうけたまはりたい。――香林禪師は所謂、大醫王、病に應じて藥を與ふ。――曰く、坐久成勞、――長い間すわつて居つたから足がしびれた。嗚呼――シンド、――嗚呼――クタビレた。――問僧は通方の作者に非ず、若し棒を行じ喝を下さば、箭を避け刀を畏るゝ武士の如く辟易するであらう、と香林禪師御診察。故に棒喝を用ひず、坐久成勞を以て此の僧を接せられたは流石に本分の宗師家である。――落草して云へば、達磨大師が印度からお出になつたのは、曰く別事ならず。あるべきやう、なすべきやう、それをお互が、なしをるや、なしをらざるや、それを見に來た、それを敎へに來た。――之是の外、實際一星事のあるなし。――由來正法に不思議なし。

「法々不陰藏、古今常顯露、」――晝は日を見、夜は星を見る。

――九々元來八十一、――「風送斷雲歸嶺去、月和流水過橋

來、」――――渴して水を呑み、飢ては飯を喫す。――――恁麼は達磨大師の西來、不西來に、寸毫も關係あるなし。達磨大師西來以前も如是、西來以後も如是、――――蓋し如是が明瞭になれば、達磨大師の西來意も明瞭になる。――――諸君、達磨大師の西來意が明瞭になりましたか。――――

趙州禪師は、祖師西來意の答に、庭前の柏樹子、と。臨濟禪師は、祖師西來意の答に、意あらば自救不了、と。或禪師は、祖師西來意の答に、谿深うして杓柄長し、と。――――見來り聞き來り味はひ來れば、天地萬物一、として祖意ならざるなし。――――されど、「非法無以談空、非會無以說法、」とにかく一應達磨大師になれ。眞箇の達磨大師にならざれば、祖師西來意の端的は知れぬ。――――多くは照々靈々を認めて驢前馬後に落在す。

――――

◎頌

一箇兩箇千萬箇、脫却籠頭卸角馱、左轉右轉隨後來、紫胡要打劉鐵磨、』

讀方

一箇兩箇千萬箇、籠頭を脫却して角馱を卸す。左轉右轉、後に隨ひ來らば、紫胡、劉鐵磨を打たんことを要す。』

一應、頌の文字を說明致します。「一箇」箇は物を數へる時に

此の文字をつけて使用する。それが支那式。――一箇兩箇千萬箇、とあるは一箇人、兩箇人、千萬箇人、と云ふ略語。――「籠頭」馬の口にかぶせて飲食の自由を束縛するもの。――「角駄」牛の角の自由を束縛するために嵌めてあるもの。』籠頭、角駄は、精神の自由、心の自在、それを束縛する煩悩、妄想。數を云へば八萬八千、實は無量無數、此の無量無數の煩悩、妄想が即無量無數の法門となる。――信ぜざれば見よ。火を吹いて燃やすも、火を吹いて滅するも、吹く人の吹きかた如何にあるのみ。只箇一點無明焔、錬出人間大丈夫。――「紫胡要打」劉鐵磨、」紫胡、傳燈錄には子胡と書いてあると大内君は云うて

居る。即ち衢州子胡巖の利蹤禪師は南泉禪師の弟子。』當時劉鐵磨と云ふ比丘尼の豪傑がありました。此の老比丘尼、機鋒嶮峻、諸方の男僧等、時々鼻の毛を拔かる。或日、一人の比丘尼が子胡巖の利蹤禪師を訪問、子胡禪師チラリと一見するや、例の劉鐵磨なることを知り、汝は是れ劉鐵磨なることなしやと聲をかけると、果して是が劉鐵磨であつたが、鐵磨は知らぬ顔して不敢と答へました。（日本の言葉で云へばドウ致しまして。）子胡は更に左轉か右轉かとアビセました。（鐵磨と云ふ處から。）鐵磨曰く、禪師顚倒すること勿れ、と云ふ其の聲の未だ絶えざるに、子胡禪師は鐵磨をピシャリと打ちました。――鐵磨と云は

る、豪傑でも女であるから、如何せん男子に一手先鞭を打たれた。實の處を云へば、鐵磨が禪師顚倒すること勿れと云ひつゝドンと子胡を一拳すればよかつたに、殘念なことをした。鐵磨、一手おくれた、其の恥が千歳の今日まで。――之是の一句、打の一字、是が眼目、注目すべし。――

重ねて婆言を弄す。必ずしも問僧に限りません。香林禪師の答へられた坐久成勞に眞箇徹底するならば、百人でも千人でも何萬何億人でも、籠頭を脱却し角馱を卸すことが出來ます。「還丹の一粒、鐵を轉じて金となし、至理の一言、凡を轉じて聖となす。」で、香林禪師の坐久成勞の一言は釋迦如來五十ケ年の說

法より更に大なるキ、メがあります。知るべし、達磨大師に限らず、何人でも長時間兀坐して居れば成勞は當然であります。故に敢て申します。坐久成勞の一句は不磨の金言、而して祖師西來意は、之是の坐久成勞の外になし。――香林禪師の坐久成勞、此の一句で祖師西來意の端的を手に入れられし人、古今東西を通じて幾人ありや。皮を得し人、肉を得し人、骨を得し人、なしとは云はず。眞箇心髓を得し人果してありや。香林禪師其の人を除くの外、蓋し一人もあることなし。――多くの人は、釋迦如來とか達磨大師とか云ふお人は全然人間と別物、一種不可思議の藝をなすか見聞覺知で出來ぬ奇術でも行なふ

かの如くに信じて居る。それは誤信であり誤解である。釋迦如來と云へ、達磨大師と云へ、其の他の佛祖、何れも人間と異なる處は、僅かに迷と悟との二字のみ。迷ふとは物と自己と二ツになること、悟るとは物と自己と一ツになること。佛祖は常に物と自己と不二一体、香林禪師も物と自己と不二一体、その不二一体の處に居つて答へられた坐久成勞。――その外に達磨大師の西來意はありません。――こゝの處が事實分明に我がものになれば、籠頭も角馱も即時に脱し即座におろすことが出來ます。果して然らば、自己が達磨大師、達磨大師が自己、自己が香林禪師、香林禪師が自己、その自己なるものが盡天地となり、盡天地が自己となる。之是が祖師西來意、――云ひ換へれば天地自然の大眞理、宇宙天然の眞實法であります。里語に盲目千人、眼明千人と云ひますが、實際は盲目千人、盲目千人で、眼明は一人もないと云うても敢て過言ではありません。雪竇禪師曰く、左轉右轉隨後來、とは能く世の中の人の總てを洞察したる格言である。』香林禪師に問うた僧が禪師の坐久成勞につき左轉し去り右轉し來る。それを抑々の初めとし、昭和の今日に至る迄、何年になるか年で云へば可なり長い。又祖師西來意に對する香林禪師の答へ、是が一波動けば萬波動くで、それから〳〵と洋の東西に傳はる。其の廣きを云へば是れ

又決して狹からず。――長い時間と廣い空間とに亘つて、左に轉じては是れ〳〵、右に轉じては斯く〳〵、と人の口馬に乘り、人の唇皮を逐ひ、相かはらず同じことを繰り返し〳〵して居る。』黃檗禪師云く、汝等諸人盡是噇酒糟漢、恁恁行脚、何處有今日、と十一則に示してある。實に黃檗禪師のお說の如く、世間の人も出世間の人も、相談をしたかの如く能く協心一致して、古人の糟粕を喰ひ先輩の後塵を逐ふことにのみ全力を捧げて居るは、洵にお氣の毒であります。』（無論衲も其の中の一人。）敢て人間に限りません。一切の塵々刹々、何れも天上天下唯我獨尊。特に人間は就中、天上天下唯我獨尊の專有者である。

其の專有權を棄權し、殊更に願ひ祈り、特別に請ひ求めて、古人のヘドカス、先輩のタレ流しを無上の珍品とし、無類の佳物とし、それを隨喜渴仰して居るとは、如何にも〳〵見さげた方々である、と燈籠露柱が云うて居りますぞ。――以上のありさまでは、大安心を得る今日、大自在を得る今日、大解脫を得る今日、其の今日は無量劫來、決して〳〵到來は致しませぬ。

――無主義で、無見識で、無目的で、無自覺で、無自尊で、――人が右と云へば右に廻り、人が左と云へば左に轉ず、と云ふぶら〳〵主義者に對し、雪竇禪師が香林禪師にかはり、祖師西來意の端的底を紫胡要打劉鐵磨、と落草なされた。――

雪竇禪師が示さるゝ、敎へらるゝ、見せらるゝ、それがそのまま祖師西來意。それを斯の如く云うたり書いたりするのも祖師西來意。』――諸君、祖師西來意の端的底がお手に入りましたか。無論お手に入りましたでせう。――お手に入つたも祖師西來意。――お手に入らぬも祖師西來意。――此の消息を古句に、「大虛無雲、淸鏡無痕、」と云ふ。此の樣子を古人は、透金剛圈、呑栗棘蓬、と云うて居らるゝ。――昭和今日、人あり來つて曇華に如何か是れ祖師西來意と問ふあらば、答へて曰はん。佐藤一齋先生が或日、公務の爲に他出して、夜の十一時頃歸つて來た。すぐ寢らるゝかと思ふと然に非ず、その儘机の前に端坐して、何やら沈吟してをらるゝ。塾生の一人がそれを見て、――「先生は未だお寢みになりませんか。」と訊くと、「いや、明日は小學の講義をする日であるから、その準備をしなければならぬ。」と答へられた。塾生は如何にも怪訝さうに、「先生はこれまで數百回小學の講義をせられて居られますのに、それでも尙準備が要りますか。」と重ねて訊くと、一齋は容をあらためて、「武士が眞劍勝負をする時は、どんな弱い敵が來ても目釘を霑さねばならぬ。それと同じく、たとへ相手が子供にもしろ、聖人の道を傳へるにはその準備をして置かねばならぬ。」と語られました。――

一事が萬事、一齋先生の如く、充分慣れてをることでも念に念を入れ、注意に注意して、眞劍にやるが祖師西來意の端的、――特に人の師となり人の上に立つものゝなすべき人間道であります。

曹洞宗總持寺の貫主、石川素童禪師は近來の名僧、禪師がまだ能登に居られた頃、一人の老婆が、靜かに坐禪をして居らるる禪師の處へ入つてきて、忰が極道者で、先祖傳來の畑を賣拂はうとして居りますから、何卒禪師から說諭をして頂きたい、と泣き〳〵訴へました。依て禪師は、その青年を呼んで、「あの畑には、寶物が埋めてあるから、安い値段で賣つては不可ぬ。」と云はれました。青年は禪師の言葉に驚いて、早速畑の隅から隅まで掘りかへして見ましたが、寶物は愚か鐚一文も出て來ませんので、青年は眞赤になつて禪師の處へ怒鳴りこみまするとと、禪師は澄ましたもの、――それなら麥を蒔きなさい。――（此の一語、水の如き冷かなうちに火の如き暖かき愛のこもつた言葉であります。）青年は禪師の此の一言を聞き、それから生れ變つたやうに勤勉な農夫になりました、と云ふことであります。――麥を蒔きなさい、――それが此の青年に對して祖師西來意の端的であります。――諸君、知るべし。祖師西來意の端的底は禪學者の專有品ではありません。――序に黑田如水君

の祖師西來意の端的底を紹介致しませう。――

黑田如水が保養のため溫泉に行つて居られた其の時、家來の者からお見舞と稱して、いろ〳〵なものを贈り屆けて來ます。

「ナニ、諸白の銘酒一樽、――うむ、五百石取りの山田殿からだ。これはずんと張込まれたわい。」――「山田殿は、さしたる裕福とも見えぬのに、これだけの事が出來るとは豪儀なものだ。」とお傍の者達がこんな話をして居る處へ、二千石取りの名村と云ふ老人の所から、自作の菜一把、無造作に束ねて屆けて來ました。――「何と、二千石取りの名村殿が自作の菜一把とは、さて〳〵ケチな御方ぢやな。」と傍役の者が口々にか

う云うてけなしてゐるのを聞いた如水は、「其方達は何と考へる。小身の癖に諸白一樽を贈るとは身の程を知らぬ大痴者ぢや。如何にも見榮を張る馬鹿さ加減が見え透いて居るわ。それに引きかへ名村の親爺はさすがの者だ。手作りの菜を屆けて吳れるといふ眞心が有難い。」と云うて親しく筆を執つて禮狀を認めたと云ふことであります。――今日、日本の朱門白屋、宦民共に、爭ひ競うて身分不相應に黃白を贈り又は頂戴しつゝある處へ、如水の此の祖師西來意の端的底は、何より結構なるものにして、何より大切なことであります。衲が黑田如水の祖師西來意に裏書をしておきます。――東鄉元帥は祖師西來意の端

的を示して曰く、「敵の砲力が大きく我が砲力が小さいからと云うて、あながち恐るゝに及ばない。――我が刀が短くば踏込んで斬ればよい。――敵彈は我に達するに我が彈が彼に達しないからとて、敵を避くるは、勇がないのだ、智が無いのだ。――そんな覺悟では到底勝を制することは出來ぬ。――我が砲彈が敵に屆かねば屆くところまで進んで敵を猛射すべきだ。――勝敗の觀念は戈を交へざる以前のことで、一旦白刃を交へた以上は決して勝敗を念としてはならぬ。敗れまいとするものゝ敗るゝは疑を容れぬ所である。」と。軍人にしての祖師西來意の端的底は、是を以て最上乘のものと致します。

諸君、最敬禮、脫帽、明治大帝の祖師西來意の端的底を申し上げます。

御　製

「世の中の事ある時にあひぬとも
　おのがつとめむわざな忘れそ」

「わが心われとをり〳〵かへりみよ
　しらず〳〵も迷ふことあり」

「たらちねのおやの教をまもる子は
　まなびの道もまどはざるらむ」

「うけつぎし國の柱のうごきなく
　榮えゆく世をなほいのるかな」

一天萬乘の君として、全國民の親として、恁麽の御意あらせらるゝが故に、國は永く榮へ、民は長へに治まる。之是を陛下の祖師西來意の端的底と申し上ぐるも敢て不可なかるべし。——更に極めて平凡なる祖師西來意の端的底を添へて措きます。

或人の祝辭。——今夕このお目出たい席上へ參列するを得ましたは私の光榮とする處であります。ついては、此の機會において私は新婦に對して一言申し上げたい、と思ふのであります。——新婦は家庭をお持ちになつたら徹頭徹尾御主人を信じなければならないことであります。御主人のお歸りが遲いからと云うて、必ず惡い所へ行つてゐると云ふ譯ではありません。兎角新婚當時といふものは、同僚などから「馬鹿に早く歸りたがるね。」なぞとからかはれると、「そんなことはない。」と意地になつて、一緒にカフエーへ行くといふやうなこともありますし、また早く家へ歸ることは出來ても、さて歸つて差向ひになつた場合どんなことを話せばいゝのか、と考へると何だかきまりが惡いやうな氣がして、つい遲く歸るといふことになる。——これなどは花婿の純眞さがかへつて花嫁をさびしがらせる實例でありまして、男と云ふものは女が想像なさる程大それたことの出來るものでない、と云ふことを特に此の際申し

た次第であります。失敬。』――是も至極結構な祖師西來意の端的底であります。――凡そ世の中は、月、雪、花に、戀と無常。是がなければ世の中は無味、――是がなければ世の中は黑漫々。――月、雪、花に、戀と無常は、世の中をして繁榮に、世の中をして快樂に、世の中をして平和になす一種の神藥であります。其の神藥が祖師西來意の端的底であることを昔の神學者は御存知なかつたかも知れぬ。――茲に老婆の臭口を弄して大方諸君の一笑を買ふのも、祖師西來意の端的底であります。――多言多謝。――

（以上昭和十二年三月二十七日講演）

379
749

昭和十三年三月二十八日印刷
昭和十三年四月　二　日發行

發行兼印刷者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終